

## 近代東京における神社境内の信仰的価値に関する研究 —近代新設の神社に着目して—

A study on the shrine faith value in modern Tokyo

—Focusing on the modern built shrines—

○兼井美咲<sup>1</sup>, 押田佳子<sup>2</sup>, 箱谷柊右也<sup>1</sup>

\*Misaki Kanei<sup>1</sup>, Keiko Oshida<sup>2</sup>, Shuya Hakotani<sup>1</sup>

Abstract: We investigated relationship between faith and town planning in Modern Tokyo. As a result, it is clarified that three faith value type of the Shinto shrine would succeed to each form.

### 1. 背景および目的

社寺境内は歴史のなかで神聖な土地として扱われ、本来はそれぞれの土地と結びついたものであり、極端に言えば土地や自然があるままの神域となっていた<sup>[1]</sup>。これは現在も鹿児島以南には御嶽<sup>みづたけ</sup>という形で残るものの、日本本土ではほぼ消滅している。しかしながら、近代化に伴い欧米からの都市計画制度を組み込むに際し、神社はそれまでにあった自然との関わりではなく、土地利用など都市機能との関わりをなかで信仰上の神聖性を担保するに至った。先行研究では、近代的に伴う土地利用の変化によって神社面積が減少していることや<sup>[2]</sup>、境内地の改変の実態などが明らかにされているが<sup>[3]</sup>、いずれも神社境内地そのものの改変については触れられているものの、神社が本来有す信仰(神様)については一切触れられていない。社会的変容の中で信仰の形態が変わり面積が縮小しようとも、何らかの形で神社自体が残るということは、未だ尚、信仰上の価値があるが故といえ、近現代の人々の暮らしの中で信仰がまちに根付いている証拠と考えられる。

そこで本研究では近代以降に東京に新設された神社を対象に、その空間構造及び周辺環境との関係性から神社の信仰的価値を見出すことを目的とする。

### 2. 研究方法

本稿では神社本庁に登録され、かつ明治維新後に東京都内に創建された神社のうち由来が確認できる9社を対象に、文献調査、現地調査およびヒアリング調査を行った(Table1)。Table2に9社の基本情報および調査結果について示す。

### 3. 近代における神社設立に関する背景

神社の在り方は明治維新の前後でかなり大きな違いがみられる。そのきっかけとなったのは、1868(明治元)年3月

Table1 Outline of the survey(調査概要) (This is original table by authors)

調査対象	東京都の神社本庁に記載されている明治維新後に創建された神社	
調査期間	2017年6月1日~2017年9月30日	2017年7月26日, 2017年8月29日, 2017年9月26日
調査方法	文献調査 <sup>[1]-[3]</sup>	ヒアリング調査
調査項目	・設立の由来 ・設計者 ・境内地坪数	・境内地坪数・周辺環境・設立の由来

に発令された太政官布告(通称、神仏分離令)<sup>[3]</sup>とそれともなう1875(明治8)年の地租改正事務局達乙第四号「社寺境内外区画取調規則」第一条で「祭典法用ニ必需」な空間としての社寺境内が再建築されたことにある<sup>[2]</sup>。これ以降、廃仏毀釈の波は神社境内から仏教色の濃い堂宇を一掃し、境内の景観を大きく変えることとなった。

### 4. 結果および考察

Table2に対象の9社を示す。神社の概要及び空間構造の分析より、「象徴型」、「英雄型」、「分祀・遥拝型」に3分類できた。以下それぞれの特徴を述べる。

(1)象徴型—靖国神社、明治神宮の2社が該当する。共通する項目として、いずれも陸軍の御用地であった広大な敷地に創建され、両社殿共に建築家の伊藤忠太が設計している。由来に着目すると、靖国神社は戊辰戦争の殉死者慰霊のため、明治神宮は明治天皇と昭憲皇太后をお祀りするために建設されたものであり、これらはいずれも国家事業として計画された勅祭社である。Table2の境内図に着目すると、明治神宮は伊勢神宮のような社叢を規範として造営されたため緑被率が90%以上に及ぶ。敷地設計に着目すると、明治神宮は境内地<sup>※</sup>全てを内苑とし、外苑及びその外遊道路と一体化させた回遊性を創出したのに対し、靖国神社は長岡安平によって、入口正面から鳥居に至る参道を左右対称の西洋式庭園を模した設計がなされた。このように境内地については明治神宮が伝統的な日本の緑地構成を、靖国神社は西洋風となっているが、いずれも回遊性が高いものになっている。また周辺との関係性に着目すると両社共に都心の軍用地に鎮座されたため、周辺には皇居や代々木公園など著名な施設が存在し、日常的に多くの来訪者が訪れる。

以上より象徴型の神社は、境内地の広さや社殿設計の格式の高さにみられるように我が国を代表するにたる信仰的価値を有し、その価値は普遍的なものとして継承されるといえよう。

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち

(2)英雄型—松陰神社, 東郷神社, 乃木神社(Photo1)の3社が該当する。これらはいずれも近代の偉人を祀っているものであり, それぞれのゆかりの場所や生前の姿を讃えるものとなっている。またいずれも郊外の住宅地にあることより地域における祭りなどでも活用されている。

以上より英雄型の神社は, 英雄の御神体及び境内にあるゆかりの施設等に信仰的価値があるといえ, その身近さ故に地域に根付いているといえる。今後も祭りなどで活用されることで, 信仰及び空間は継承されるといえよう。

(3)分祀・遥拝型—東京大神宮, 東伏見稲荷神社, 小石川大神宮, 母智丘神社の4社が該当する。これらはいずれも, 本社が地方にあるものを遥拝するための場として都内に設けられたものである。東伏見稲荷神社を除く3社は比較的面積が狭く, 全体のほとんどを神域が占める。また緑被率が約10~20%と低く, 近隣との境界部に目隠しの植樹がある程度であった。尚, 東伏見稲荷神社は郊外にあるが故, 緑被を比較的高く確保することができたと考えられる。また小石川大神宮に至っては, 境内地にマンションが建っており, 2つの鳥居の間の参道がマンションの通路と兼用となっている(Photo2)。

以上より, 分祀・遥拝型の神社は, 基本的に御神体が鎮座する社殿のみに信仰的価値があるといえる。これはそれぞれの本社を遥拝することが主目的である為, 最低限の神域とその結界たる鳥居があることで成立するといえよう。今後都心において土地利用の変動などにより, 神社境内地の縮小をせざるを得ない場合は, 最低限神域のみを残すよう配慮することが神社が地域の拠り所として機能するために必要といえよう。

### 5. まとめ

近代の神社は, 国家事業として価値を高める象徴型, 近代の偉人が神格化され将来に語り継がれる英雄型, 信仰の場として東京に遥拝所を創建した分祀・遥拝型の3つに分かれることがわかった。今後, 象徴型, 英雄型は境内全体または御神体とそのゆかりの場所の信仰的価値が現在の姿のまま継承されるとみれるが, 分祀・遥拝型においては社殿のみが残ることで信仰的価値が担保され, 今後やむを得ず既存の神社が縮小を迫られる場合の措置として有効な手段とされる一方で本来あるべき神社の姿との乖離が懸念される。しかしながら小石川大神宮の神域が現代のまちづくりにおいて担保されたことは, 地域における信仰が未だ根付いている証拠といえ, 今後も祭りなどで活用することでその信仰的価値は継承すると推察される。

#### 【補注】

※1 御願は沖繩で神を祀る聖所のこと。  
 ※2 本研究での境内地とは, 各神社の敷地全体を示す。

Table2 Survey result of target shrine (対象神社の調査結果) (This is original table by authors)

神社名	(1)象徴型		(2)英雄型
	靖国神社	明治神宮	松陰神社
境内図			
和暦/西暦	明治2(1869)	大正9(1920)	明治15(1882)
由来	戊辰戦争以来の殉死者慰霊のための建設	第122代の明治天皇とその皇后である昭憲皇太后をお祀りする	長州藩士吉田松陰の旧藩士門弟らが中心となって, 吉田松陰の墓のあった当地(旧同藩主毛利大善大夫の抱屋敷)に堂を建てて創建
設計者	伊藤忠太	伊藤忠太	井上馨, 伊藤博文, 乃木希典, 山縣有朋
面積	99,000 m <sup>2</sup>	約7,000,000 m <sup>2</sup>	不詳
緑被率	57.62%	92.26%	62.48%
御神体	国家防衛のために亡くなられた方々の神霊が祀られている	明治天皇	吉田松陰
周辺環境	靖国通り, 皇居	井之頭通り, 代々木公園	隣公園, 商店街
祭り	○(みたまま祭り)	×	○(幕末維新祭り)
所在地	千代田区	渋谷区	世田谷区
神社名	(2)英雄型		(3)分祀・遥拝型
東郷神社	乃木神社	東京大神宮	
境内図			
和暦/西暦	昭和15(1940)	大正12(1923)	明治13(1880)
由来	東郷平八郎を祀るために, 全国民に呼びかけて国民からの浄財によって神社を創建すること	旧帝国陸軍大将・乃木希典と妻・静子夫人を没後神格化して祀った神社	明治天皇のご親断を仰ぎ, 東京における伊弉諾大神の遥拝所として創設。元々日比谷にあり, 昭和3年ご親断地へ移ってきた
設計者	不詳	大江新太郎・大江宏	不詳
面積	不詳	9,917 m <sup>2</sup>	約3,305 m <sup>2</sup>
緑被率	60.27%	69.34%	32.51%
御神体	東郷平八郎	乃木希典	天照大神, 豊受大神
周辺環境	図書館, 中学校, 幼稚園	隣公園, 小中学校	区民館, 高校
祭り	○(みたまま祭り)	○(夏祭り)	○(七夕祈願祭り)
所在地	渋谷区	港区	千代田区
神社名	(3)分祀・遥拝型		
東伏見稲荷神社	小石川大神宮	母智丘神社	
境内図			
和暦/西暦	昭和4(1929)	昭和41(1966)	大正8(1919)
由来	伏見稲荷神社の御分霊を奉斎したいと願う関東地方稲荷信仰者の参拝の便を計り, また迷信などあやまった稲荷信仰の是正徐浄化を計るうとする伏見稲荷神社の協力によって創建	国民とリわけ崇敬者の方々の幸福を祈念する目的を以て, 伊勢日向国の北諸郡庄内(宮崎県)の神宮より特別におみしるしを拝載。神宮の宮と称え奉る小石川大神宮を創設	大正8年に黒木昇・ハナ両氏が西都城北方五キロメートルの石峯山に鎮座する母智丘大神を感得して自宅内に奉斎した
設計者	不詳	不詳	不詳
面積	13,200 m <sup>2</sup>	不詳	902 m <sup>2</sup>
緑被率	76.91%	11.82%	21.43%
御神体	宇迦御魂大神, 佐田彦大神, 大宮能売大神	天照皇大神	豊受姫大神, 大祭大神
周辺環境	大通り, 川	春日通り, 中央大学	住宅街
祭り	×	○(富坂2丁目町内祭)	×
所在地	西東京市	文京区	町田市



Photo1 Nogi shrine (乃木神社)

Photo2 Koishikawa shrine (小石川大神宮)

#### 【参考文献】

[1]後藤武, 復刻版日本の広場, p34, 彰国社, 2009/5/10 [2]中島節子, 近代京都における「神苑」の創出, pp. 237-242, 1997/3 [3]藤岡洋典, 明治聖徳記念学会要報 復興第43号, 近代の神社建築, p148, 2006/11